

# 仙台・文化財サポーター会活動記録（保存継承部会）

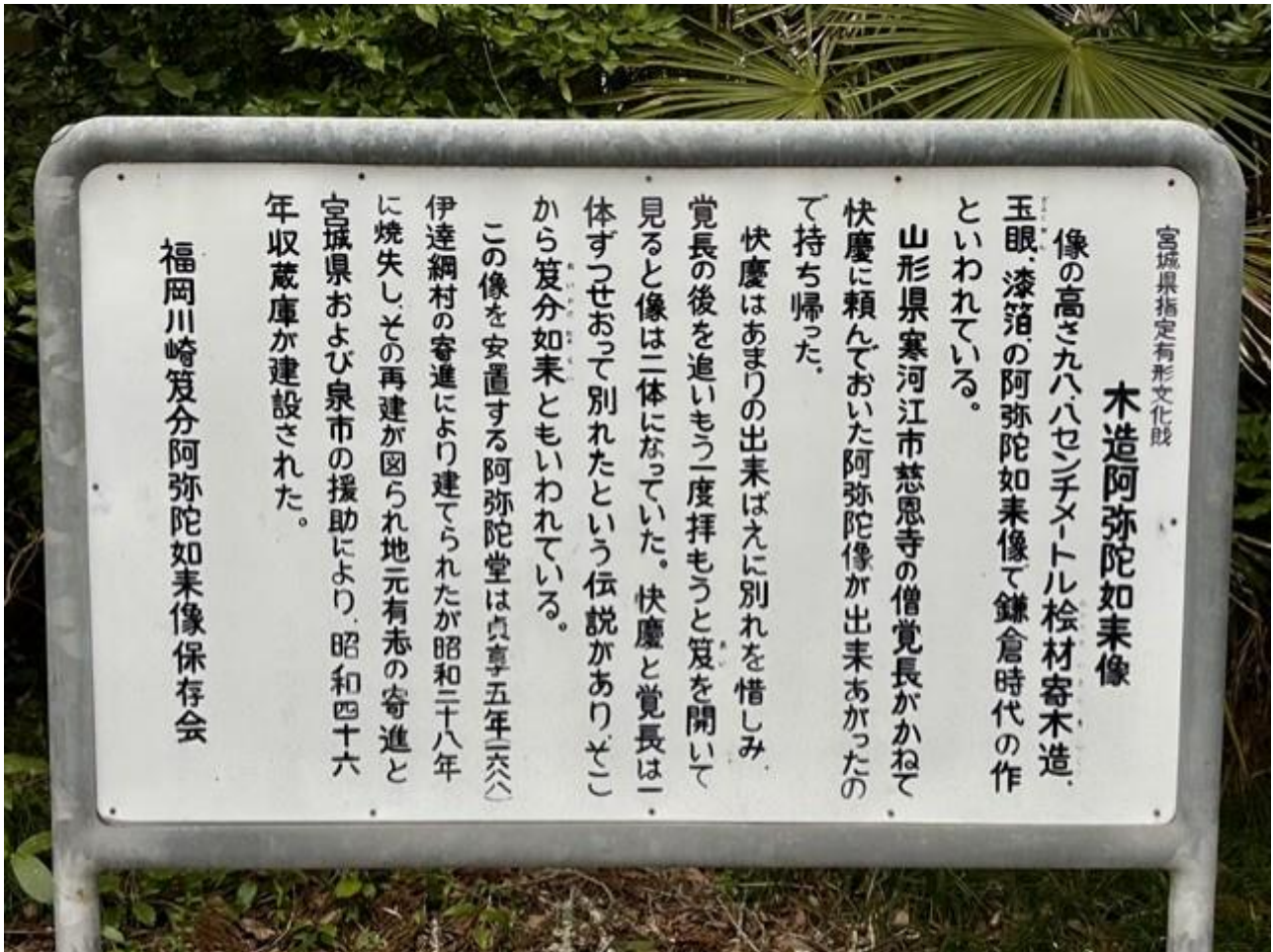
○2026年3月19日(木)13時30分～14時

- ・講話『笈分阿弥陀如来』について
- ・講師 仙台市博物館学芸企画室長 酒井昌一郎氏
- ・場所 仙台市博物館講堂  
(受講者は関係者含め25名)

## ○はじめに

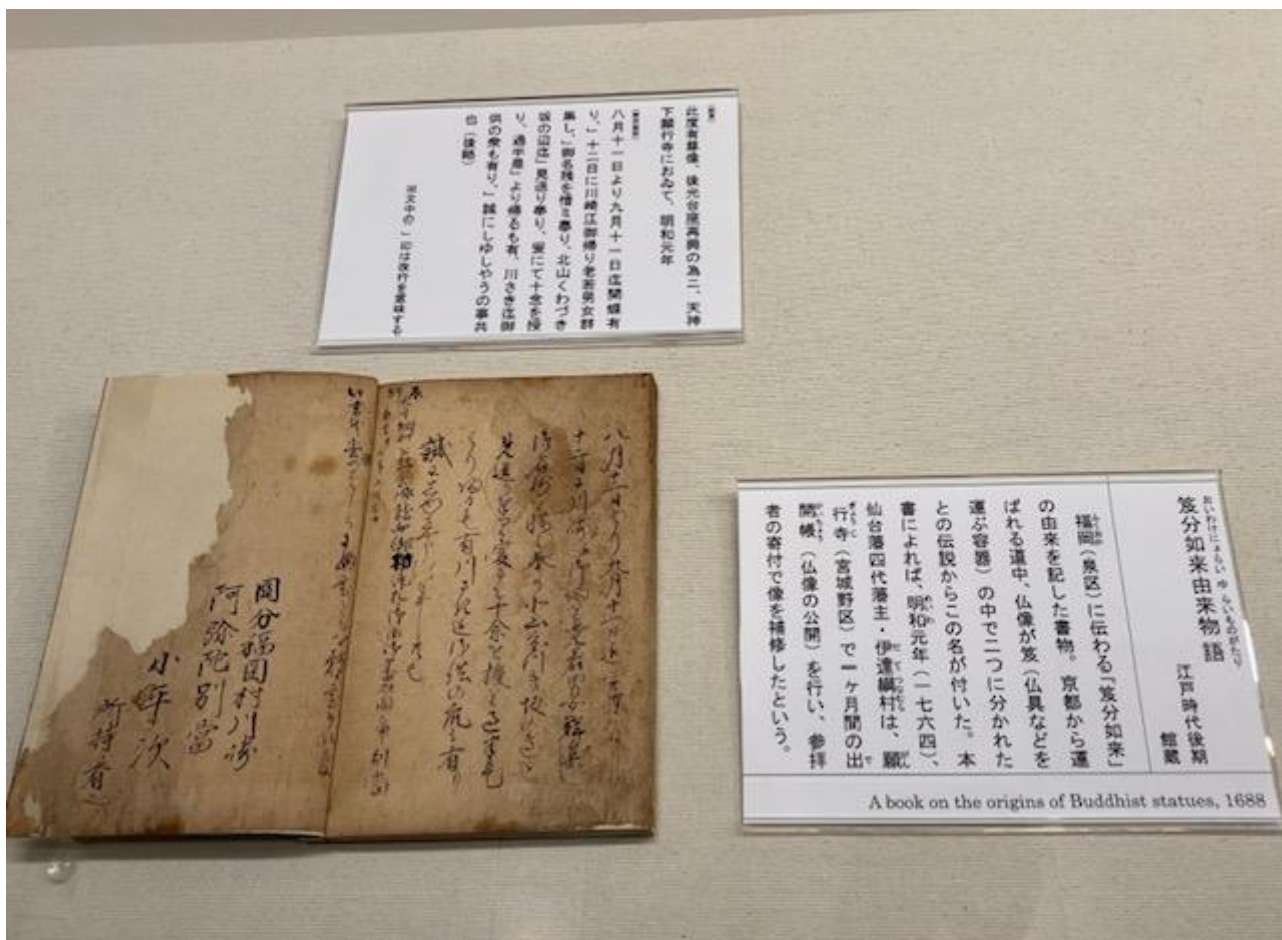
現在、仙台市博物館で特集展示『地域史～泉区の歴史探訪～』が4月26日まで開催されています。昨年4月に根白石地区を巡見。阿弥陀堂を訪れた際、ご本尊は仙台市博物館に収蔵されていることを知りました。

お堂にある案内板には、このような興味深いエピソードが記載されています。しかも仏師は快慶！



以来、いつの日かお目にかかりたいと願っていたところ、今般仙台市博物館で、あの『笈分阿弥陀如来立像』が展示され、ついに拝観することができ、しかも酒井先生による解説というプレミアムな機会をいただきました。

## ○笈分阿弥陀如来について



笈分阿弥陀如来立像は、漆箔（しっぱく）、玉眼を入れた上品下生（じょうぼんげしょう）印の仏像で、「笈分」（おいわけ）如来と通称されています。

羽州村山郡慈恩寺（湯殿山）の僧・覚明が、京都の仏師・快慶に依頼して作仏してもらった仏像を背負って帰る途中、あまりの出来栄えから譲るのを惜しんで後を追ってきた快慶と笈（おい）を開けたところ、分身して二体になっており、一体は快慶が京都蓮光寺に納め、もう一体が本像であるという。

伝説の真偽はともかくとして、頭部の表現、衣文（えもん）を胸部・腹部の二か所で折り返す扱い、たたみこむような裾の表し方などに、いわゆる快慶様式をみることができます。

この仏像を安置するための阿弥陀堂は、貞享5年（1688）四代藩主伊達綱村の寄進によって建てられたものであったが戦後焼失し、近年再建されました。

ヒノキ材 寄木造 像高は三尺（98.8cm）

（展示仏像は撮影禁止。プロジェクターに写し出されたこの画像だけ撮影が許可）

### ○ 京都「蓮光寺」の負別如来について

「笈」の中で二体になった仏像の一体は京都五条下寺町の「蓮光寺」にあると伝えられています。当地では「笈分如来」と呼んで崇拝していますが、蓮光寺では「負別（おいわけ）如来」となり、ほとんど同じような伝説をもっているのは、とても不思議な感動を覚えます！

### ○笈分如来と負別如来の比較

- 負別如来は嘉禎元年（1235 年）に造像されていますが、笈分如来の記述はないものの 13 世紀鎌倉時代の双方近いタイミングで作られたもので、とても美しいお姿をしているのが共通点です。
- 作者は快慶の別名、安阿弥（あんなみ）
- 仏像の様式は同じですが京都の方が 2 尺 7 寸（80.7cm）と 20 cm ほど低いことがわかりました。
- 仏像と台座の設置の仕方が異なり、蓮光寺仏像には足の裏には仏足（仏様の足の裏の模様）があることを知りました。

### ○阿弥陀如来の特徴について

- 「左足が一步前に出ている」これは臨終時に一刻も早く来迎するため
- 「耳に穴があいている」のは私たちの声を聞いてくれるということ表現
- 「唇には隙間があいている」のは私たちに向かって喋ってほしい、できれば阿弥陀様にこっち側に向かって歩いてきてほしい。そういった思いを全部込めた姿が阿弥陀如来立像だということを知りました。 ※ここまで計算されて彫像されているとは驚きです！
- また仏像は光の当て方で全然表情が変わること、見る角度で印象が大きく変わることを酒井先生の解説画像で確認できました。

### ○最後に

ご覧になっていない方は、この不思議な伝説をもつ笈分阿弥陀如来立像の流れるような美しい衣のドレープをぜひご覧になってください。

そして機会がありましたら、京都蓮光寺の阿弥陀如来に拝観して見比べて見たいです。はるか鎌倉時代の貴重な仏像が今日まで残り、こうして拝観できますことにこの上ない喜びを感じます。

今回の特別展示を企画・解説していただきました酒井先生にあらためて感謝申し上げます。

以上 本多正明（記）

（参考）仙台市文化財課 HP

